

マイクロスリップに着目した 演劇における自然なコミュニケーションの再現に関する研究 The Role of microslip to realize natural communication in acting

坂本真樹[†]
Maki Sakamoto

[†]電気通信大学
The University of Electro-Communications
sakamoto@hc.uec.ac.jp

Abstract

This study argues that microslip such as turning your eyes or using tools plays an important role to realize natural communication in acting.

Keywords — microslip, acting, communication

1. はじめに

自然場面での会話は、当事者による外界の知覚と発話などの行為の自然な循環が行われている。それに対し、演劇での会話は相手が何を言うかが決まっており、相手の発話など外界の知覚を必要とせず自身が発話などの行為が行われうることから、演劇における会話は自然場面での会話とは異なる。しかし、優れた演劇者の演技からは、自然場面での会話と変わらない自然さを感じることができる。後安(2003)ではマイクロスリップが、喜多(2002)ではジェスチャーが、本多(2005)ではあいづちや言いさしが自然なコミュニケーションに必要な要素としてあげられている。特に後安(2003)では、平田オリザ(劇団青年団主催、劇作家、演出家)の稽古場のフィールドワークを通して、俳優一人ひとりの演技の試行ごとにみられる行為の組み立ての変化を調べた結果、最も特徴的であったのがマイクロスリップであるとしている。平田(1995)は、自分のセリフをうまくしゃべることだけに集中しがちな俳優の意識をそれ以外のものへも分散して向けられるようにしなくてはならないとしている。つまり、マイクロスリップが発生していることがより自然に見える会話に必要ということである。そこで本研究では、自然であると評価される演技にはどのような特徴がみられるのかを抽出し、演劇において自然なコミュニケー

ションを再現するためにはどのような要素が必要なのかを実験的に確認することを目的とする。

2. 研究方法

本研究では2つの実験を行った。1つ目の実験では、演劇歴1年未満の演劇初心者11名に「華々しき一族」という台本の一部を演じてもらい、それをデジタルビデオカメラで撮影して、自然なコミュニケーションに必要なと思われる要素がどれほど出現するかを見た。尚、演劇初心者には、各人3日間(1日目に2時間、2日目に1時間、3日目に1時間の計4時間)協力してもらい、撮影は1日目、3日目の最後に行った。その後、撮影した映像データから、先行研究で自然場面での会話で出現するとされる「視線をそらした回数」「ジェスチャー数」「小道具を使用した回数」「体の向きを変更した回数」「移動をした回数」の5つの要素の数を集計した。2つ目の実験では、1つ目の実験で撮影した映像を被験者31名に見てもらい、演劇初心者の演技がどれほど自然かを7段階で判定してもらった。

3. 結果及び考察

実験結果について、重回帰分析(従属変数は2つ目の実験で得た「自然さの評価」)、相関分析、分散分析を行った。重回帰分析では自然さの評価に及ぼす各要素(視線をそらした回数など)の影響を、相関分析では評価が上昇するほど各要素が多い(少ない)と言えるかを、分散分析ではクラスター分析で分けた、評価が高い・普通・低いという3グループ間に有意差があるのかを分析した。

まず、評価が高いとされる演技と、評価が低いとされる演技間にはどのような差があるのかをみるため、1つ目の実験の被験者11人の1日目、3日目のデータを別のものとして扱い、計22個の個別値を用いて解析した。まず、重回帰分析の結果、自然さの評価に関する重回帰式は(1)式となり、「視線をそらした数」、「小道具使用数」、「移動した数」の3つの要素が $p < .05$ で有意であった。

$$\begin{aligned} \text{評価値} = & 0.097^{**} \times (\text{視線をそらした数}) \\ & + (-0.010) \times (\text{ジェスチャー数}) \\ & + 0.213^{*} \times (\text{小道具使用数}) \\ & + (-0.069) \times (\text{体の向きを変えた数}) \\ & + 1.681^{*} \times (\text{移動した数}) + 1.334 \quad (1) \end{aligned}$$

*: $p < .05$, **: $p < .01$

次に、相関分析結果は表1に示す通りであり、「視線をそらした数」のみが $p < .05$ で有意であり、自然さの評価が上昇するほど、演技者の視線をそらした数が増えることがわかった。

表1 相関分析結果

	評価値 (平均)	視線をそ らした数	ジェス チャー 数
Pearson 相関係数	1	.653**	-.088
有意確率 (両側)		.001	.698
N	22	22	22

	小道具 使用数	体の向き を変えた数	移動した数
Pearson 相関係数	.113	-.314	.418
有意確率 (両側)	.618	.155	.053
N	22	22	22

*: $p < .05$, **: $p < .01$

最後に分散分析では、事前にクラスタ分析で分けた評価が高い・普通・低いという3グループ間に有意差があるのかを分析した。その結果、「視線をそらした数」が $F(2,19)=7.585$, $p < .01$ で有意、「移動した数」が $F(2,19)=8.636$, $p < .01$ で有意であった。このことから、評価の高いグループほど「視線をそらした数」「移動した数」が多いことがわかった。

4. おわりに

本研究によって、評価が高い(自然に見える)演技に見られる要素とは、重回帰分析、相関分析、分散分析の3つで有意であると判明した「視線をそらした数」であることがわかった。また重回帰分析から、「視線をそらした数」に加えて「移動した数」と「小道具使用数」も自然さの評価と関係があることが示された。ただし、視線の移動や道具の使用や移動が多すぎれば不自然さが生まれる可能性もあり、その点についても今後検討が必要である。

会話中に視線をそらしたり道具を使用したりするという行為は、マイクロスリップとされるものであることから、演劇において自然なコミュニケーションを再現する上で、マイクロスリップが重要な役割を果たすことが本研究によって示された。本研究では演技初心者の演技のみを対象として行ったが、今後は初心者と熟達者の違いについても分析してみたい。

参考文献

- [1] 喜多 壮太郎, (2002) 人は何故ジェスチャーするのか, ジェスチャー・行為・意味, 共立出版.
- [2] 後安 美紀, (2003) “マイクロスリップと不在の他者の視点に立つこと”, 日本認知言語学会論文集, Vol. 3, No. 3, pp. 355-357.
- [3] 平田オリザ, (1995). 平田オリザの仕事1: 現代口語演劇のために, 晩聲社.
- [4] 本多 啓, (2005) アフォーダンスの認知意味論, 東京大学出版会.